

舟大垣を発し桑名に赴く（頼山陽）

蘇水 遙々 海に 入つて 流る

櫓声 雁語 郷愁を 帯ぶ

独り 天涯に 在つて 年暮れんと 欲す

一篷の 風雪 濃州を 下る

蘇水遙遙入海流 櫓聲雁語帶郷愁
獨在天涯年欲暮 一蓬風雪下濃州

解説 山陽三十四歳の秋、美濃に遊び、年も暮れに近づき、帰路を木曾川に取り、大垣から伊勢の桑名に出た折の作で、木曾川を下りつつ、懐郷の情を述べたもの。

語釈 ※大垣 今の岐阜県大垣市。昔は大垣と桑名の間の交通はもっぱら木曾川の舟運びであった。※桑名 今の桑名市。※蘇水 木曾川のこと。※入海流 美濃の高須海口に流入するのをいう。※櫓声 櫓をこぐ音。※雁語 雁の鳴く声。※郷愁 故郷を思いしのぶかなしみ。※天涯 故郷から遠く離れた他国。※一蓬 一艘の船。※濃州 美濃の国。

通釈 見渡せば木曾川は遙かに遠く海にまで流れ込んでいる。この風景の中を自分は今、船で下りつつあるが、時折、きしる櫓の音や、頭上を渡る雁の声が愁いを帯びて故郷を思い出させる。今、一人故郷を遠く離れたこの土地にあって、今年も暮れようとしている。白分は寂しい気持になって降りしきる風雪の中を一隻の小舟に乗って濃州を下ってゆくのである。